

テレホン法話
「ご近所の方々のお見送り」

第三組 浄福寺 杜多陽子

先日、お寺の前のおうちの方が急に亡くなりました。
87歳のお元気な男性の方です。
お若い時には、小学校の先生をしておられて、
様々な世代の方々から慕われるような明るい方でした。

そのAさんは、ご近所の誰にでも挨拶をされて、お話してくださる気さくな性格だったと思います。
突然のことでご家族と親族の皆さまは悲しみ、近所の者も皆さん驚いて、寂しくなったなと思いました。

通夜と葬儀は斎場で行われ、当日火葬場からご親族の方々が戻ってこられる頃に控え室の方で待っていました。
大きな和室が襖で仕切られて、隣の部屋はお手伝いをされた皆さんがお勤めが始まるまでお喋りをしながら過ごしておられます。たわいも無い笑い話で盛り上がっています。

ご近所のご夫婦や気心の知れた仲間のような方々で、昔のしきたりや義務というわけではなく、もちろん名字親戚で決めごとはあるのですが、
お世話になったAさんへ感謝の気持ちで集っているようでした。

そして、このように大勢の人たちがお見送りできるお葬儀というのが、近頃はだんだん減っています。
これは、時代が変わって人間関係も変化していると感じられます。

今の世代の考え方によっては、それを古くて形式的で面倒なことと思われれます。
お付き合いを堅苦しいと省いて、大事なことが簡単に済まされていくように思うのです。

この場で自然に知ることができるのは、家族が皆元気に過ごせる時間は永遠ではなく、誰にでも命が終るときが来るのだということです。

以上